地球温暖化の現状

1　地球温暖化のメカニズム

二酸化炭素などの温室効果ガスの大気中の濃度が上昇 → 温室効果がこれまでより強くなり、地表面の温度が上昇 → **この現象が地球温暖化**

2　IPCC(気候の変動に関する政府間パネル)第5次評価報告書第１作業部会報告書の主な結論

（１）観測事実

・気候システムの温暖化については疑う余地がない。
・１８８０～２０１２年において、世界平均地上気温は0.85℃上昇。
・最近30年の各10年間の世界平均地上気温は、1850年以降のどの１０年間よりも高温。
・世界平均海面水位は1901～2010年の期間に0.19m上昇。

（２）温暖化の要因

・人間活動が20世紀半ば以降に観測された温暖化の主な要因であった可能性が極めて高い。

（３）将来予測

・将来予測では４つのシナリオがあり、可能な限りの温暖化対策を前提としたシナリオでは、気温は0.3～1.7℃、海面上昇は0.25～0.55m、非常に高い排出が続くシナリオでは、気温上昇は2.6℃～4.8℃、海面上昇は0.45～0.82mの範囲に入る可能性が高い。（1986年～2005年を基準とした2081～2100年における予測）

3　IPCCの概要

◆気候変動に関する政府間パネル(IPCC:Intergovernmental Panel on Climate Change)は、人為起源による気候変動。影響、適応及び緩和方策に関し、科学的、技術的、社会経済学的な見地から包括的な評価を行うことを目的として、1988年に世界気象機関（WMO）と国連環境計画（UNEP)により設立された組織

・第１作業部会：気候システム及び気候変動の自然科学的根拠について評価

・第２作業部会：気候変動に対する社会経済及び自然システムの脆弱性、気候変動がもたらす好影響・悪影響、並びに気候変動への適応のオプションについての評価

・第３作業部会：温室効果ガスの排出削減など気候変動の緩和のオプションについての評価

・温室効果ガス目録に関するタスクフォース：温室効果ガスの国別排出目録作成手法の策定、普及及び改定

※注意
概略を抜粋した資料のため、正確な情報は報告書をご確認ください。
(H26.7.24勉強会資料用)